

◎特集／対談

# 地域とともに生きる

三重県知事 野呂昭彦 + 学長 豊田長康

三重大学講堂（三翠ホール）

三重大学は地域圏大学として、三重県のさらなる発展への貢献を目指し

自治体や地元企業との連携を積極的に図っています。

今回は野呂昭彦三重県知事をお招きし、「地域とともに生きる」というテーマで

人材育成や今後の連携のあり方について学長と語り合っていました。

◎司会・進行  
東 晋次  
ひがししんじ  
理事・副学長（企画・評価担当）  
歴史学博士  
専門分野は、中国古代史

## 好調な経済があらわす 三重県の潜在能力

**司会** 本日はお越しいただきありがとうございます。三重大学は三重県唯一の国立大学として、県と協力していろいろな活動を展開しておりますが、本日は知事から大学に対し、さまざまなご意見をいただければと思います。まず、県政の現状についてお話しただけですか。

**野呂** 現在、グローバル化が進展し、三重県、三重県民も毎日の生活が世界情勢に大きく影響される時代となっています。一方で、日本は人口減少社会に突入し、これまでの価値観や社会構造に基づく制度が合わなくなるなど、大変革が求められています。国、自治体を取り巻く環境は厳しいものがありますが、その中でも三重県は産業経済がとても活発で元気です。私が知事になった2003年以降を見ても、2003年から2006年の4ヵ年で三重県の製造品出荷額は約40%も増加し、その間の実質経済成長率は全都道府県の中でナンバーワンを誇っています。また、2007年の観光入込客は前年比3.2%増の3,397万人となり、実質的に平成6年に次ぐ高い数値を記録し、有効求人倍率も全国で常に上位を維持しています。まだ県民が経済の好調さを実感できるほど充分ではないかもしれませんが、他県と比べれば、まるで中国のような活況を呈しているわけです。この元気をこれからも継続していかなければなりませんから、三重県は今、産業政策の面でも三重大学をはじめとする大学や研究機関、民間企業などと連携しながら知識集約型産業構造への転換を図っています。また、社会が成熟化する中で、三重県でも県民はこれまでのような物の豊かさ、経済の

発展だけではなく、生きがいや暮らしのうるおいを強く求めるようになっていきます。今後は経済面だけではなく、古来から「<sup>うま</sup>美し国」と讃えられてきた三重の自然や歴史文化などの財産を生かしながら、本当に県民の生き方を高められるような取り組みが必要です。そこで三重県では人を元気にし、互いを高め合う文化の力に着目し、文化力をベースにすべての政策を見直そうと、質の行政改革を進めています。文化政策の象徴的なものとしては、新しい博物館を作ろうという計画があり、三重大学や地域の文化施設、図書館なども連携した、文化と知的探求の拠点を整備していきたいと考えています。

**豊田** 国立大学は法人化後、より自立的な運営が求められるようになり、三重大学は地域貢献を旗印にさまざまな取り組みを進めてきました。結果、企業との共同研究数は240～250件で全国13位、中小企業との共同研究数では3位にランクし、大学の規模からすると、産学連携についてはかなり高い実績を挙げていると自負しています。また、今、三重県の経済が好調ということで大変うれしく思っているわけですが、南北格差の問題などもあり、三重大学では三重県の南部地域とさまざまな取り組みを行っています。三重県立熊野古道センターでは人文学部が中心になって共同研究を進めていますし、尾鷲の海洋深層水も三重大学との共同研究で生まれたものです。今後も多方面で地域の問題の解決に協力させていただきたいと考えています。そして、文化力を高める政策、知識集約型産業構造への転換につきましては、まさに大学が貢献できる分野であり、県の政策には非常に共感を覚えます。今後も、県と一致協力して地域貢献に取り組んでいくつもりです。

**野呂** 実は日本経済研究センターの2008年年頭のデータによると、三重県の潜在成長率は全国で3位なんです。1位は滋賀県、2位は東京都、4位は愛知県、5位は沖縄県という順番ですが、東京以外の滋賀や沖縄は将来まだ人口が増えて、労働力が潜在的にあるのではないかとという点で評価が高い。一方で、三重県は人口が減っていく県に推定されているのに、その中で何が評価されているのかというと、技術と資本です。三重県には自動車産業や電機産業を中心に、川上から川下までトータルで技術が集積し、IT関連産業の集積も今、急速に進んでいます。こういった強みを生かしながら将来に向けてより持続的に発展していくためには、持てる技術をどう展開していくのか、展開を図るためにどう人材を育成していくのが重要です。これらの見通しがしっかりしていれば、必然的に資本も三重県に集まってくる。その意味では、私はこれからも三重大学との連携がうまく展開できれば、三重県の潜在成長率は実質ナンバーワンになると思っています。

## 地域の持続的な発展を担う イノベーション人材の育成

**司会** 持続的な発展には人材育成が重要とのことですが、今後の展望についてお話しただけですか。

**豊田** 三重大学では、「地域イノベーション学研究科」という新しい大学院の設置を計画しています。文部科学省に申請し認められれば、2009年春に修士課程、博士課程を同時に開設する予定です。従来の日本の大学院は極めて専門的な研究能力の育成に主眼を置いてきたため、博士課程修了の



豊田長康 とよだながやす  
 学長 医学博士  
 専門分野は、産科婦人科学・周産期医学・生殖内分泌代謝学



野呂昭彦 のろあきひこ  
 三重県知事  
 三重県松阪市出身。慶應義塾大学大学院修士課程修了。  
 衆議院議員、厚生政務次官、松阪市長を経て、2003年より現職。

「地域に根ざす三重大学と、持続する地域づくりを目指す三重県の連携は、必ずや重要な成果を生みだすでしょう」

学生を企業が採用できない、採用率が低いという問題が起っています。この地域イノベーション学研究科では、地域や社会に求められる大学院生を育成するために、従来の研究開発能力に加えて、製品開発から販売まで一貫してプロジェクトをマネジメントできる人材、実践的な研究開発マネジメント能力のある人材の育成を目標としています。研究開発能力のある教員に指導いただくと同時に、プロジェクトマネジメント能力を養成する教員を新たに外部から招き、学生には双方の能力を身につけさせたいと考えています。同じコンセプトの教育プログラムとして、医学系研究科にバイオ・メディカル創業プログラムがあります。これは地域の方々から好感触を得ていて、中堅企業の幹部、社長自らが希望して大学院に入るということまで起こっています。それを参考に今度は全学的な大学院に拡大し、この地域の、特に中堅企業のイノベーションを促進できる人材を供給していきたいと考えています。

野呂 地域イノベーション学研究科については、三重県もおおいに期待しています。こ

れから地域が持続的に活力を維持していくには、プロジェクトマネジメントができる研究開発人材の育成が欠かせません。三重大学がその中心になって人材輩出に取り組んでいただけるのは、県にとっても大変ありがたいことだと感じています。また、県の「高度部材イノベーションセンター」では、現在、三重大学と連携して「技術者育成講座」を開講しています。三重県の将来を考え、電気・電子工学、機械工学、メカトロニクスといった領域の専門的学問、環境配慮工学や実践品質管理工学、コストダウン技術、生産管理工学などのカリキュラムを体系化したプログラムを実施し、専門的な人材を育成していこうというのが狙いです。そのほか「都市エリア産学官連携促進事業（発展型）」に採択されたプログラム（※1）の目的は、大学の研究成果を活用した新技術シーズを生み出し、産学官連携基盤の構築を目指すものですが、新しい技術の研究と同時に人材育成を非常に重視しています。ここでも三重大学には指導的な役割をお願いしたいと思います。

### 社会ニーズに応える 先進的な教育の取り組み

司会 地域に貢献できる人材を輩出するために、大学には現状の教育の改革も求められていますね。

豊田 三重大学では、これまでも医学部では医師や看護師、教育学部では教員、工学部ではものづくり人材、生物資源学部では地域の第一次産業をリードする人材を育成し、また人文学部はまさに文化力を支える人材を輩出してきました。こうした従来の教育も特色あるものですが、さらに社会ニーズに応えるために、PBL（プロブレム・ベースド・ラーニングあるいはプロジェクト・ベースド・ラーニング）教育（※2）を取り入れたり、学生が主体となって環境ISO14001の認証を取得したりと、非常に実践的、体験的な教育を始めています。また、PBL教育にeラーニングを加え、ソーシャルネットワークサービスなどのICTを活用し、学生と先生、学生同士のコミュニケーションを促進しています。また、国際化戦略として現在、教育学部と中

「三重県は、日本の中でも、最も未来へ向けて明るい希望の持てる県ではないかと、感じております」

国の天津師範大学とでダブルディグリープログラム（※3）を始めたほか、日本語教育コースも設置し、日本語や日本の文化社会にも精通した優秀な人材を育成しようとしています。三重県の企業などが海外展開しようというときに、必ず求められる人材になると、確信しております。

野呂 今、三重県では、ものづくりを理解するために大学生が地元企業を訪問する取り組みを考えており、三重大学の学生の皆さんにも積極的にご参加いただきたいと考えています。三重県内には素晴らしい中小企業があるので、ものづくりの魅力を体感してもらいたいですし、三重大学には全国から学生が集まっていますから、そうした人材に引き続き三重県に留まっていたくためにも重要なことだと考えています。

豊田 もう一つ、三重大学は女性研究者の育成にも力を入れています。文部科学省の女性研究者支援モデルプログラムに採択された「パールの輝きで、理系女性が三重を元気に」では、理系の女性を育てようと県内の幾つかの高等教育機関と協力して、

女子中高生の皆さんに理系に興味を持っていただけるような取り組みを進めていく予定です。

### 密なコミュニケーションが 新しい連携を生む

司会 産学官連携に関し、自治体、大学それぞれのお考えをお聞かせください。

野呂 三重県は全国の大学や研究機関、あるいは海外の研究機関とも連携を進めていますが、やはり地元の機能拠点である三重大学には一番大きな役割を果たしていただくことが、三重県の将来の成長につながると思います。産業政策における三重大学との連携では「高度部材イノベーションセンター」の活動をはじめ、三重大学が津市と取り組むメカトロロボットの研究についても、県も一緒に展開を図っていくつもりです。また、熊野古道の活用や教育分野でも連携事業を展開していますし、医師不足に対応するために県の寄附講座を医学部に設けていただきました。過疎地域あるいは人口減少の

問題、農業や水産、林業といった一次産業も含め、今後あらゆる面で県民生活に直結する課題の解決のために、三重大学との連携が必要になってくると思います。

豊田 熊野古道のお話が出ましたが、三重県の多くの市町に三重大学の先生が出向き、いろいろな地域計画に関与しています。産学官連携と言うとどうしても理系をイメージしがちですが、実は文系の先生方も真の意味で地域に貢献していただいています。その点でも三重大学の活動をきちんと評価していただき、大変うれしく思います。法人化後、知事には県と大学のコミュニケーションを積極的に図っていただいています。今後さらにもいい関係づくりを大学としても進めていきたいと考えています。

### 三重の独自性を発揮した 全国トップレベルの産学官連携

司会 三重県ならではの産学官連携の特長という点ではいかがでしょうか。

野呂 三重県の産学官連携の好例が、「み

えメディカルバレー」(※4)です。平成18年度の「日経バイオビジネス第3回バイオクラスターランキング」では全国4位の高い評価を得ています。中核になるようなハードの施設がない中で何が評価を受けているのかと言えば、これは三重大学との連携の中で治験ネットワークを構築できたことが大きく、しかも、その後の運営状況も成功しています。

**豊田** みえメディカルバレーの治験ネットワークは、非常によく機能しておりまして、おそらく治験の件数、実績は全国でトップファイブに入っているのではないのでしょうか。それは大学だけで治験を行うのではなく、地域のすべての病院、多くの開業医の方々のご協力のもとに進めているからで、有機的なネットワークをつくったのが一つの成功の秘訣であると思っています。これはメディカルバレーだけに限らず、地元の中小企業も巻き込んだ産学官ネットワークの形成、それによる連携は、例えば大企業の誘致に比べれば非常に地味ですが、今後の三重県の持続的な発展は、中堅企業の成長なくしてあり得ません。こうした考えのもと、三重大学では四日市フロント(※5)のほか、伊賀にも産学官連携拠点をつくら

うとしています。中には学内でどんと構えていたらいという大学もあろうかと思いますが、三重大学はそうではなく、もっと現場に密着した連携が必要なのではないかと考えているわけです。いわば産学官連携のコンビニ戦略によって、より一層の効果が出てくるはず、と予想しています。

**野呂** 三重県では「新しい時代の公」と呼んでおりますが、県民あるいは大学、企業なども県政のパートナーであり一緒に公を担ってこう、という呼びかけをしています。三重大学においても、大学のパートナーとして地域をとらえ、学内に閉じこめるのではなく対等な関係を持ちながら展開しておられるのでしょうか。私も、大学がいろいろな形で地域に直接出て連携を図ることで、新しい成果につながるものと期待しております。

### 常にみずみずしい 美し国 三重をともに築く

**司会** 最後に、県が進めている「美し国おこし・三重」(※6)に関し、今後の取り組み、大学と県がどのような連携が可能なのか、

お考えをお聞かせ願えますか。

**野呂** 三重県では、「文化力」に基づく政策を「新しい時代の公」にふさわしい進め方で展開する「質の行政改革」を進めています。その先導的な取り組みである「美し国おこし・三重」は、“人と人、人と地域、人と自然の“絆”を紡ぎ上げ、神話や伝説に語り継がれるにふさわしい「美し国 三重」をつくる”を基本理念とし、「文化力」を生かした持続する地域づくり”をコンセプトとしています。県民にとって一番大切な人生の舞台である「美し国 三重」を磨き、もっと魅力ある地域にするために地域資源を活用して取り組む地域づくりを基本に、2009年から6年間にわたり、県内全域で多彩なイベントを開催する予定です。伊勢神宮で20年毎に行われる式年遷宮は、いつも若々しく生まれ変わるといふ“常若”の考え方を象徴するものですが、「美し国おこし・三重」によって常にみずみずしい常若の三重をつくりたいと考えています。また、イベントと言っても旧来の囲い込み型ではなく、町そのものがイベントの舞台という形で展開します。三重大学の先生方には、現在策定中の基本計画にも参画いただいておりますし、県ではこの地域づくりを地域経済、コミュニティービジネスへの展開に結びつけることも考えていますので、大学の支援や助言がますます大事になってくるでしょう。地域づくりに対する産学官連携において、大学に対する期待は大変に高まっております。

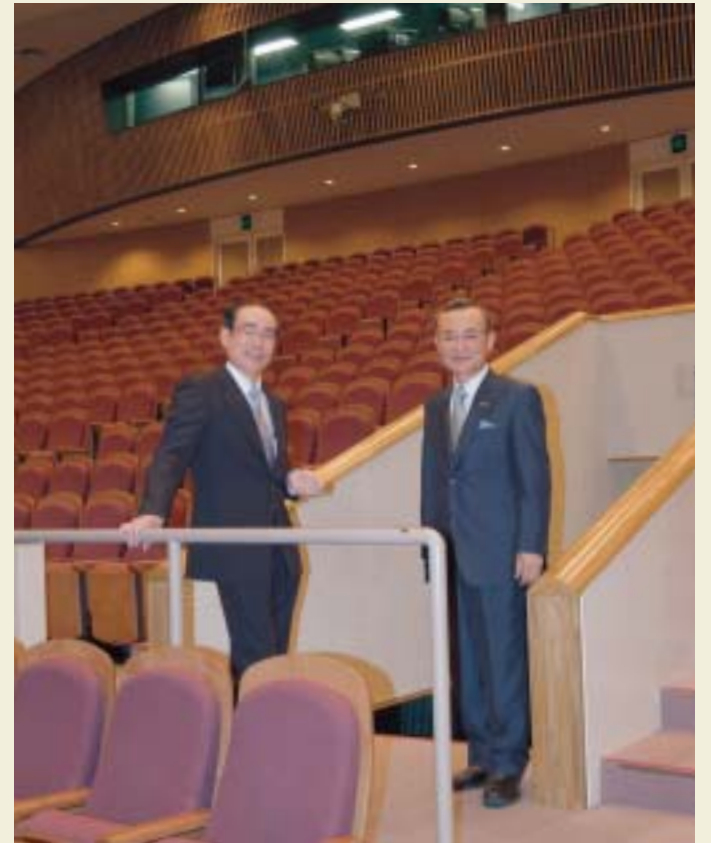
**豊田** 「美し国おこし・三重」のポイントは、まさに舞台づくりであり、地域づくり。イベントが終わっても、そこでつくられた舞台、地域はずっと続いていくものでないといけないということですね。それには地域のコミュニケーション、コミュニティーづくりが重要です。例えば、それを助ける一つのツールとして、情報分野の先生方を中心にソーシャルネットワークサービスを最大限活用する方策を提案するなど、大学はいろいろなご協力ができると思います。また、三重大学の学生がISO14001の取得に必死になって取り組んでくれたよう

に、今の若い人もうまく誘導すれば地域に溶け込み、三重県の価値を再発見するはずですから、やはり若い人に魅力のある美し国づくりが大切ではないでしょうか。

**野呂** そうですね。そういう熱い思いを持った人たちを発掘していくことが第一歩です。今、少しずつ始めていますが、各地域で座談会を持ち、地域のキーパーソンの思いを高めていけば、その中から地域毎にさまざまなテーマが出てくるでしょう。その一つひとつをきちんと成果に結びつけていくために、いろんな観点から大学に指導してもらい、一緒になって取り組んでもらうことがあろうかと思えます。私は知事としてこの三重県を見ますときに、日本の中でも、最も未来へ向けて明るい希望の持てる県ではないか、みんなの思いを集約していけば、必ず成果を出せる県ではないか、と感じております。先日、ドイツの州政府の方々や企業の方々に、三重県と連携すればWinWinの関係が構築できると申しあげたんですが、三重大学もぜひ三重県とともに、県内の地域あるいは県外の方々とWinWinの関係づくりを目指していきたいでしょう。

**豊田** ありがとうございます。大学としても美し国おこしには期待しておりますし、ぜひ協力させていただきたいと思えます。地域に根ざす三重大学と、持続する地域づくりを目指す三重県が、地域とともに生きるという意志のもと、これからもいろんな連携をしていけば、必ずや大きな成果が生まれるでしょう。また、三重大学は国立大学を取り巻く厳しい状況の中でも、果敢に挑戦を続けてきました。まさにWinWinの関係を構築しようと懸命に努力し、今、その成果が形になりつつあります。これをさらに三重県と一緒に追求めてまいりたいと思えます。

**司会** 本日はありがとうございました。



(※1) 都市エリア産学官連携促進事業(発展型) 文部科学省の施策。2008年度、三重県・三重大学・三重県企業による提案「新世代全固体ポリマーリチウム二次電池の開発と高度部材イノベーションへの展開」が採択された。四日市に開設された県の「高度部材イノベーションセンター」はその中核拠点。

(※2) PBL 学生が少人数で自主的に取り組む問題発見解決型教育・学習。

(※3) ダブルディグリープログラム 2006年、三重大学は、天津師範大学と大学間協定を締結し、日本語教育コースを開設。両大学の同コースの学生が相互に2年留学し所定の単位を取得すれば、両大学の併せて2つの学位(学士)が授与されるプログラムを開始。

(※4) みえメディカルバレー(構想) 三重県の3つのバレー構想の一つ。県内の大学や研究機関、企業、サービス事業者などが連携し、競争力のある医療・健康・福祉産業の創出と集積を図ることを目的とする。

(※5) 四日市フロント 企業や自治体などへの技術支援やセミナーの開催など、北勢地域における三重大学の地域連携の拠点として活動。三重北勢地域地場産業振興センター(じばさん三重)内にオフィスを構える。

(※6) 美し国おこし・三重 2009年から2014年にかけて地域の多様な主体が特色ある地域資源を生かして取り組む地域づくりを基本に、多様な催しを展開することによって、地域の魅力や価値を向上させ、発信するとともに、集客交流の拡大を図り、自立・持続可能な地域づくりにつなげていく取り組み。三重大学長もこの取り組みを推進する実行委員会の委員。